

「大きな古時計」の誕生秘話

「大きな古時計」は2004年の第2回リリオコンサートの演奏曲でした。今回もその時と同じ楽譜を使います。

「大きな古時計」の原曲は、アメリカの作曲家ヘンリー・クレイ・ワークにより作詞・作曲され、1876年（明治9年）に発表されました。

日本では、戦前の1940年に「お祖父さんの時計」としてレコード化されましたが、歌詞は原曲とは全く異なり、シンデレラをモチーフとしたもので、あまり歌われることはありませんでした。

1962年（昭和37年）にNHKの「みんなのうた」で、保富庚午（ほとみこうご）の訳詩により放送されました。

これが日本で最初に歌われた「大きな古時計」です。

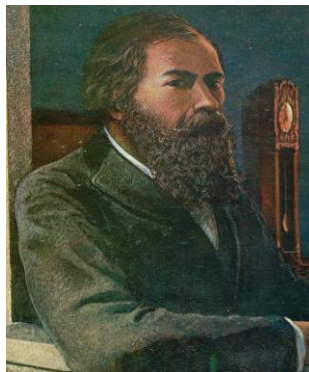
さらに、この歌が広く歌われるようになったのは、2002年に平井堅がカバーしてからのことです。

CDの出荷枚数は90万枚、NHK紅白歌合戦にも出場するなど大ヒットです。翌2003年には選抜高校野球の入場行進曲に選ばれています。

リリオが歌った2004年は、この歌がたいへん流行っていた年でした。

2006年には「日本の歌百選」に選ばれています。これは文化庁などが、親子で永く歌い継いで欲しい歌を100曲選んだものです。

1876年（明治9年）という遠い昔に作られ、当時のアメリカで大流行した歌が、なぜか長い間、日本で歌われることがなかったのに、21世紀になって急に広く歌われるようになったのですから、遺跡から出てきた宝物みたいです。



作曲家ヘンリー・クレイ・ワーク
(1832~1884)

切なくも優しいこの歌は、実際に起こった不思議な出来事をもとに作られています。

1874年、作曲家ヘンリー・クレイ・ワークは、劇場公演のツアーでイギリスに渡っていました。

その際に泊まったホテルは、イギリス中部のダーラム州ピアスブリッジにある「ジョージ・ホテル」でした。

そのホテルのロビーに、古いけれど高さ2メートルを超える大きくて立派な振り時計が置いてありました。

しかしそれは動いていません。

首をかしげるワークは、ホテルの主人に尋ねました。

主人は、動かない時計を置いているわけを話し始めました。

このホテルは、もともとジェンキンズという兄弟二人が経営していました。

ホテルのロビーには、ジェンキンズ兄弟のお兄さんが生まれた日に買って来た大きな木製の振り時計が置かれていました。

この大きな時計はとても正確で、標準の時計として信頼され、そしてこのホテルのシンボルになっていました。

ある日、独身同士でずっと一緒だった弟が、病気で亡くなりました。するとそれまで何年もの間、正確に時を刻み続けていたその時計が急に遅れるようになったのです。



ジョージ・ホテルに、今でも展示されている「おじいさんの時計」
歌詞、時計の解説なども展示されている。



持ち主が亡くなった時刻11時5分で止っている。

最初はわずかな遅れでしたが、日が経つにつれて遅れ度合いが増し、いくら修理をしても直りませんでした。

古い時計なので弟の死と時計の遅れは偶然に起ったことかも知れません。

ここまでの話ならそう言えるかも知れませんが、この時計にまつわる不思議な話はさらに続くのです。

弟の死から1年少し経ったある日、今度はお兄さんが弟のあとを追うようにして亡くなりました。

訃報を聞いて駆けつけた友人や知人たちが、ロビーに集まり故人の思い出話などを行っている最中、ふと時計を見た一人が「おや？」とつぶやきました。

「時計が止まっている……」

ホテルのロビーはざわめきました。

驚くことはそれだけではありません。

動きを止めた時計の針が指していたのは、お兄さんが息を引き取った時刻、11時5分だったからです。

その事実気づいた人たちは、愕然とその場に立ちすくみました。

彼の死の瞬間、振り子もピタッと止まってしまったのです。

きっと亡くなったお兄さんは、この時計と長いあいだ心を通わせていたのだろう、と居合わせた人々は思いました。

その後ずっと現在まで、この時計は11時5分を指したまま、ジョージ・ホテルのロビーに置かれています。(前ページの写真)

古時計の不思議なエピソードを聞いたワークは、俄然創作意欲を燃やし、劇場公演で疲れていたにもかかわらず、その日は一晩中一睡もせず、この曲を一気に書き上げました。

イギリスでの公演を終え、ワークはこの曲を早速アメリカに持ち帰り、この曲を「Grandfather's Clock」(おじいさんの時計)として発表したところ、温かいメロディと不思議な物語が相まって、多くの人々から賞賛され、楽譜が100万部も売れたといわれます。今から140年も昔の話です。

さて、日本語版「大きな古時計」ですが、保富庚午の名訳が大ヒットの要因ではありますが、最後のクライマックスのところの訳には異存があります。

♪天国へ昇るおじいさん 時計ともお別れ 今はもう動かないその時計

時計が動かなくなったのはいつのことなのか？

ネジを巻く人がいなくなったので動かなくなっただけのことか？

この歌詞ではそのように思われます。。

最後のクライマックスの部分、原詩はこのようになっています。

It rang an alarm in the dead of the night,

真夜中に時計がボンボンと鳴った。

And alarm that for years had been dumb;

今までずっと鳴らなかったのに。

And we know that his spirit was pluming its flight,

私たちは知った。おじいさんの魂が飛び立とうとしていることを。

That his hour of departure had come.

おじいさんが天に召される時が来た。

Still the clock kept the time, with a soft muffled chime,

時計はまだかすかな音で時を刻んでいた。

As we silently stood by his side;

私たちがそっと彼に寄り添ったときには。

But it stopp'd short, Never to go again,

でも、その時計は突然止まって、もう動かない。

When the old man died.

おじいさんが亡くなった、そのときに。

おじいさんが息を引き取ったそのとき、時計も止まった、となっています。だから「時計ともお別れ」ではなくて、時計と一緒に天国に行ったのです。理屈っぽくて申し訳ありませんが、ここは重要なポイントです。

恐らく原詩はいささかオカルト的なので、童謡としては相応しくないと考え、恣意的にソフトな表現にしたものと思われる。

いずれにしても心にジーンとくるお話ですね。

亀岡弘志(記)